

はばたきインクル支援だより



深谷はばたき特別支援学校 平成31年1月15日 No.5



巡回支援で小中学校や高等学校に行くと、先生方が様々な工夫をして児童生徒にかかわっているのを見ることができます。しかし、時に、支援が手厚すぎたり、逆に支援が足りないことがあります。今回は適度な支援について考えていきます。



特集 「適度な支援」ってなんだろう？

1 支援の目的

支援とは、児童生徒が自分でできるようにするために、それぞれの実態に合わせて、現在取り組んでいる課題のステップを細かくすることです。児童生徒が困らないようにお手伝いすることではありません。また「この支援はいつかは外すもの」という視点を持ち、ずっと同じ支援をし続けることがないようにします。

支援を通して、児童生徒が、自分でどこまでできるのかを確認し、できない理由や、具体的にできる方法を理解したり、できた感触をつかんだりします。必要な時に必要な支援を頼める力も育てていきます。

2 手厚すぎる支援の問題点

丁寧に細かく支援をすることが、よい指導というわけではありません。児童生徒の持っている力を最大限に引き出せる支援ができるようにします。

支援が手厚すぎるために生じる問題点には以下のようなものがあります。

- ・ 児童生徒の側から離れられなくなる。いつも付きっ切りにならないといけない状態になってしまう。
- ・ 先生が先回りしてしまうと、できなくても児童生徒が困らなくなってしまう。「自分でできるようになりたい」という意欲が出ない。自分からできるようになるための手がかりを求めなくなってしまう。
- ・ やってもらえるのが当たり前になると、支援を求めなくなる。

3 支援が足りない時の問題点

「このくらいは自分でやってね」という思いから、支援の量を減らしすぎ、児童生徒に求めることが多くなると、次のような問題が生じます。

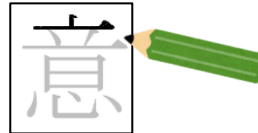
- ・ 見ただけで自分には無理と判断し、やってもいないのにあきらめるようになってしまう。
- ・ 課題の意味が伝わらず、何をやっているのかわからなくなってしまう。課題をやることが目的になってしまう。
- ・ 自信がなくなってしまう。「何をやってもダメだ」と自己肯定感が低くなる。学習や学校がつまらなくなり、不登校の傾向が強くなる。

4 支援方法の見つけ方(観察のポイント)

- ① 「ここができるようになってほしい」という課題を見つけたら、初めは多めの支援をして取り組ませます。(最初から支援が少ないと、その課題自体をやる意欲がなくなってしまうことがあります。少し「お手伝い」を多めにして、「このぐらいならできるかな?」という意欲を持たせます。)
- ② 少しずつ支援を減らしたり軽くします。「できたり、できなかったり」という境界線を探します。
- ③ 境界線のところの理由を考えます。できない理由からできるための手立てを考え、具体的な支援を試みます。
- ④ 支援がうまくいったら、そこにとどまらず、先の支援を考えます。

具体例

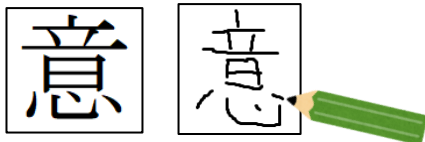
- ① 「漢字が書けるようになって欲しい」
手厚い支援…漢字をなぞる → できる



- ② 境界線を探す。

プリントの漢字をノートに書き写す → 間違いが多くなる

10cm四方の紙に大きく漢字を一文字書き、それを見て書き写す → できる



- ③ 境界線の理由を考える。具体的な支援を試みる。

理由…「プリントだと他の漢字に目移りするのかな?」

- * 手立て1 プリントの視写してほしい漢字に○をつける。
- * 手立て2 プリント1枚の漢字の量を減らす。

酒 祭 軽 階 飲 暗

拾 始 研 球 運 **意**

集 歯 港 具 横 育

軽

意

祭

横

- ④ うまく行ったら先の支援を考える。

* 手立て1ができたなら

- プリントに○をつけるのではなく、自分で下敷きなどで他の漢字を隠して、視写する練習をする。 人に頼らない工夫
- 黒板の視写してほしい漢字に○をつけて練習する。 できる幅を広げる。

* 手立て2ができたなら

- プリントの漢字の数を少しずつ増やす。 できる幅を広げる。
- みんなと同じプリントを半分に折って、漢字数を少なくする。 人に頼らない工夫・支援の許可や依頼

今年も、どうすれば児童生徒が課題に主体的に向き合えるか、わかって取り組むことができるかを、一緒に考えていきましょう。